Osaka University Knowledge Archive

Title	中世ドイツ叙事文学の表現形式 : 押韻技法の観点から
Author(s)	武市, 修
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47106
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【29】

氏　　名	武（たけ）　市（いち）　修（おさむ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０６２７　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 7 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**中世ドイツ叙事文学の表現形式－押韻技法の観点から－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　林　　正則 （副査） 教　授　大庭　幸男　　助教授　三谷　研爾 大阪市立大学教授　松村　國隆

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、12 世紀から 13 世紀にかけ隆盛期を迎えたドイツ宮廷叙事詩作品における「迂言表現（Periphrase, Umschreibung)」（本来１語で表すところを動詞と名詞、動詞と不定詞ないし現在分詞など複数の語を使ってなされる代替表現のこと）と「縮約形（Kontraktion)」（言語音が、その間にある子音要素をも含めて次に続く、あるいは先行する母音とともに収縮してより大きな発音単位になる現象のこと）の事例を広汎に収集・精査し、口承文学であるそれらの作品における韻律法や押韻技法がテクスト形成に大きな役割を果たしていたことを明らかにした論考である。（Ａ４判で 250 ページ、400 字詰め原稿用紙換算　約 750 枚。）

本論文は「第１部　迂言的表現」と「第２部　押韻のための様々な語形」の２部から構成されている。第１部では「迂言的表現」の諸相と類別が９世紀のオトフリト『総合福音書』にまで遡って古代・中世資料からの豊富な用例に基づいてなされ、第２部では中高ドイツ語（Mhd.）文学の独特の表現形式である動詞の〈縮約形〉の多様な形態が検討されている。

第１部は、５つの章から構成されているが、第１章では、tuon（nhd.＝tun）の用例を中世文学資料から広汎に収集し、詳細に検討することで、意味的に近い machen に比べて中世ドイツ語では tuon の用例が圧倒的に多いことを統計的に明らかにし、その理由として tuon が豊富な語形によって韻律を整え押韻するのにきわめて便利な語であったこと、また韻を合わせるためと考えられる tuon の〈代動詞としての用法〉の消長が中世叙事詩の隆盛と消滅にほぼ並行していることから、口承文学であった中世文学では韻律と押韻の規制力がきわめて強かったことを明らかにしている。

第２章では、現在分詞を伴う迂言表現が取り上げられている。まず sin, wesen（nhd.＝sein）＋現在分詞の文型が、中世では必ずしも動作や状態の継続（Aktionsart）を示すものではなかったとし、脚韻文学の隆盛と共にそうした表現が急速に広まったことから、これもまた押韻手段の一つとして用いられたものと推定している。ラテン文学の散文訳『タティアーン』ではほとんど見られなかったこの文型が、聖書の初の韻文訳であるオトフリト『総合福音書』では 90 回も用いられ、それ以降の中世文学では脚韻と関わって頻繁に用いられたことを、統計的に提示している。werden、その他の動詞と現在分詞の結びつきも検討され、現在分詞を用いた迂言表現はほとんどが押韻のためであったと結論づけている。

第３章では、Nhd. においては限定的にしか用いられない「zu（ahd.＝zi、mhd.＝ze）のない不定詞と動詞の結びつき」を、動詞 gân（nhd.＝gehen）と stân（nhd.＝stehen）について『ニーベルンゲンの歌』『イーヴァイン』『パ

ルツィヴァール』『トリスタン』『イタリアの客人』の５作品から用例を収集、検討し、それらがきわめて高い割合で押韻のために用いられていることを統計的に提示している。続けて「場所の移動を表す動詞と不定詞」「kunnen と不定詞」「tuon と不定詞」「pflegen と不定詞」「beginnen と不定詞」の組み合わせが取り扱われているが、とりわけ pflegen と beginnen の場合、その語形の多様性の大きな理由が押韻に由来していたことが統計的に明らかにされている。

第４章では完了の迂言表現が検討される。Mhd. の叙事詩では完了形が過去ではなく、現在または未来に属する出来事ないしは無時間的な事柄を表している用例がしばしば見受けられること、そしてその多くは押韻のための完了形であることが明らかにされている。話法の助動詞についても、過去形を用いるか〈現在形十完了不定詞〉を用いるかは押韻によって規定されていることが多いこと、また前つづり ge- についても、それが明確な文法的理由なしにただリズムを整えるという理由から付されている事例が頻繁に見受けられることが指摘される。

第５章では、dinc（nhd.＝Ding）、êre（nhd.＝Ehre）、liebe（nhd.＝Liebe）、geschiht（nhd.＝Geschichte）、gewin（nhd.＝Gewinn）などの名詞を用いた迂言表現が中世叙事文学の主要作品から広汎に収集、分類、検討され、それらもまた多くの場合韻律、押韻のために多用されたことが指摘されている。

第２部では、中高ドイツ語文学における〈縮約形〉の諸相が検討されている。縮約形の可能性と頻度は方言によって差があり、また詩人によってその用法に違いが見られはするものの、その多くが韻律を整え押韻するために用いられたことが明らかにされている。第１章から第３章では、legen（nhd.＝legen）と ligen（nhd.＝liegen）、sagen（nhd.＝sagen）、lâzen（nhd.＝lassen）の縮約形の用例が『ニーベルンゲンの歌』『イーヴァイン』『パルツィヴァール』『トリスタン』『イタリアの客人』の５作品から網羅的に収集、検討されている。第４章では、Mhd. の dô（nhd.＝da）の別形 duo、nu（nhd.＝nun）の別形 nuo について、また衣装を表す Nhd. の kleit（複数 kleider）の事例、さらに beginnen の過去形 began と別形 begunde、begonde の使い分けが、豊富な用例に即して検討され、さらに中世文学においてしばしば見られる語中音、語末音消失という現象が韻律という観点から検討され、最後にこれも中世文学で頻繁に現れる地名のさまざまな別形の使用が韻律、押韻の観点から考察されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、12 世紀後半から 13 世紀にかけて隆盛期（一般に「シュタウフェン古典主義」と呼ばれる時代）を迎えた中世ドイツ叙事文学、『ニーベルンゲンの歌』『イーヴァイン』『パルツィヴァール』『トリスタン』『クードルン』その他の作品の全容を展望しながら、それらの宮廷叙事詩における「迂言表現」と「縮約形」の夥しい用例を網羅的に収集し、検討し、分類のうえ統計的に提示し、それらが韻律や押韻技法と深く関わっていることを実証的に明らかにした論考であり、ドイツにおいても従来顧みられることが少なかった課題に取り組んだ労作である。

中世ドイツ文学のテクストは基本的にはすべてが口承されたものであり、複数の筆写本の形で今日まで残ってきたために、複数の異本間における綴字、用語法、表現法、統辞法等の異同も大きく、その研究は本文校訂というきわめて地味で実証的な作業の積み重ねの上に成り立っている。申請者自身も長年にわたってそうした地味な骨の折れる作業に携わってきたが、その成果が論文の随所に生かされ、本論文でもテクスト校訂における様々な問題点の指摘と提言も行われている。各テクストに固有の表現傾向を統計的分析によって明らかにするとともに、事例ひとつひとつに丹念な検討をくわえ、言語規範と押韻技法の密接な関連を周到に記述した本論文が、中世研究に貢献するところはきわめて大きい。本論文による、こうした緻密な事例分析が、中世ドイツ文学の豊かな表現世界に照明を当てたばかりでなく、近世ドイツ語（Nhd.）の成立過程の一側面をも浮き彫りにした功績もまた、高く評価される。

ただ、取り扱われているテクストが中世ドイツ文学全体から見ればいまだ限定されている点、またきわめて貴重な統計的なデータを提示しながら、実証的な姿勢に徹するためかデータの分析、解釈に対してあまりにも慎重である点、また本文校訂の困難さという中世文学研究の特性からやむをえない事情は理解しつつも、押韻・韻律の形式や規則から逸脱する語形・文型をただ本文校定の問題としてのみ扱うのではなく、そうした多様性を中世文学テクストの本質に属するものとして理解する視点があり得ないのか、その意味で現時点での研究状況へもう一歩踏み込んだ言及があったもよかったのではないかという点、それらを望蜀の感ではあるが指摘しておきたい。

とは言え、それらは本論文が果たした中世文学研究に対するきわめて大きな寄与をいささかも損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。